

## 古代ローマの庭園における色石彫刻

ルーヴル美術館蔵のバイサナイト製「獅子像」(LL 30/N 199/Ma 1355)を中心に-

氷見野夏子 (東京大学)

庭園と訳されるラテン語の「ホルティ」は、共和政末期以降のローマにおいて、実用性を失った古い市壁の外側に相次いで建てられた、広大で特権的な邸宅を指す。現存遺構は少ないが、発掘から多数の質の高い彫刻が見つまっている。中でも歴代皇帝が滞在した「サルスティウス庭園」は豊富な出土彫刻で知られ、白大理石製のクラシック時代やアウグストゥス時代の彫刻が注目されてきたが、帝政ローマの色石彫刻を扱った展覧会(2002年、ローマ開催)では同庭園由来の作例が登場した。また、「ラミア庭園」は色石を用いた高価な建築装飾で知られる。共和政末期以降、勢力下に置いた地中海各地から白大理石と色石が大量に流入し、首都ローマの様相は一変したとされる。プリニウス『博物誌』第36巻では、豊富な種類の色石を含めた大理石の採石地とローマへの流入過程に関心が払われている。しかし、ローマにおける「ホルティ」の建設と色石の流行がほぼ同時代の現象であるにもかかわらず、両者の関わりについての総合的な研究はない。本発表は、ルーヴル美術館蔵のエジプト産バイサナイト(アルカリ玄武岩)製の獅子像を起点に、ローマの庭園における色石彫刻の様相の一端を明らかにする。

まず来歴を確認する。ヴィンケルマンはこの像を、かつて「サルスティウス庭園」が占めていた一角に建てられたポリオーニ邸で見ている。先行研究では、この証言に基づいて同庭園に帰属させる仮説が出されたが、像の同定を現アルバーニ邸蔵の別の作品と誤認している。一方でベッリ・パスクア(1995)は件の像を正しくルーヴル像と特定しているが、来歴をポリオーニ邸とするに留まり、「サルスティウス庭園」との関連には言及していない。このため、ルーヴル像は同庭園に結び付けられてこなかった。

次に、「サルスティウス庭園」および他のローマの庭園における色石彫刻の事例を参照し、庭園への帰属の妥当性を傍証する。とりわけ、色石による動物彫刻として「サルスティウス庭園」からはペロポネソス半島南部で採れるロッソ・アンティーコ製のカバの像、「マエケナス庭園」からはエジプト産のセルペンティーナ・モスキナータ製の犬の像が知られる。また、素材や年代は異なるものの、チーマ(2014)は前6-4世紀の白大理石製の獅子像数点をローマの庭園に帰属させている。

最後に、ルーヴルの獅子像を「サルスティウス庭園」のコンテクストに位置づける。獅子像は後1-2世紀頃に、この像と同じくポリオーニ邸旧蔵のナイル河の神ハーピーは前1-後1世紀に年代づけられる。また、ポリオーニ邸に隣接するヴェロスピ邸からは、いずれも色石による5体のエジプト彫刻が出土している。これに対し一帯の遺構は後2-3世紀頃で、出土彫刻よりも概ね年代が降る。これを踏まえ、色石彫刻が帝政中後期の「サルスティウス庭園」の改修において再利用され、異国的な装飾を構成したと論じる。